堀内正樹・西尾哲夫編『〈断〉と〈続〉の中東――非境界的世界を游ぐ』悠書館　2015 年　xxi+419 頁

社会について書くということ

最近、書くということについて考えさせられている。評者の師であった三木亘先生が 2016 年 9 月 3 日に亡くなって、今更ながら彼が歴史叙述の方法にこだわり続けていたことを思い起こすからである。学生時代の恩師の言葉というのは、多くの思い込みと共に身体深くに埋められてしまうものであるので、どれだけ彼の言葉を正確に理解したのかは心許ないが、秀れた歴史叙述は、変容する社会の中で生きる当事者の切実な問題意識に発しており、その社会における多元的な主体を総体的に把握し叙述することを可能にするのは、自己の主体をさらけ出してこそだと彼は言い続けていた。「のっぴきならない」主体としての世界観を伴わない個別的事象研究は血の通わない解剖学のようであり、多くの研究者がそれを客観的と誤解しているとも言っていた[1)]。これらの印象的な言葉を身中に埋め込みながらも、（あるいは埋め込まれたからこそ）評者もまた書くと言う表現を巡り、未熟な己という主体と圧倒的客体の狭間を長く彷徨っているように思う。

そのような評者にとって、実は、本書を初めて読んだ時の正直な感想は「やられた！」と言う素直な思いであった。やられたと思ったのは表現形態とテーマの二つにわたるが、以下順次解説したい。その前に、表現においては自己の立ち位置を示すことが大事と言っていた師の言に従い、編者の一人である堀内正樹と評者は全く別々にそれぞれが中東を研究対象とする学への道を辿ったのだが、にもかかわらずと言うかだからこそなのか、学閥というものに一切関心を示さなかった三木のそれほど多くはないだろう（勝手）弟子であると自称している間柄であることを述べておく。

さて、やられたと思う第一点は、まず表現形式として各著者の論考に付随して「コラム」を置いた編集方針であった。論文集にコラムがつくこと自体はそれほど珍しいことではない。特徴的なのは各論考の著者たちが、編者たちの設定する「非境界的世界」という研究会の共通テーマに肉薄し、対峙し、理解しようとする戸惑いや困惑、またかれら若手研究者を挑戦的に煽り深みある理解の糸口に誘おうとする編者たちとの確執、こうした研究会の進展経過そのものをコラムにエッセイ風の表現形態で如実に生々と吐露していることで、読者もあたかもそれらの議論に参加しているかの如くの臨場感を得られるのである。研究者各自の語りには、共通テーマの理解に果敢に挑み、悪戦苦闘しながら道を切り拓き、いかに彼らの論考に至ったのかその過程が表れており、読者は各論考が書かれた経緯そのものをちょっとハラハラドキドキしながら同時進行的に追体験することができる構成となっている。三木の言った、まさに「のっぴきならない」問題意識に追い込まれた主体がそこにさらけ出されているのである。

これは、論考とコラムの二本立てと言う本書の編集方針をたてた編者らの企図がまさに功を奏した結果であり、それぞれの著者の研究対象に対する立ち位置が良く分かる構造となっている。コラムは論考の後に置かれているが、読者にはまずコラムから読み、その後で論考に読み進むことを勧めたい。各論考で表現者としての各著者が何にこだわり何を解明しようとしているのかが、その個人的な生活の悩みや編者との確執を通して理解できる仕組みとなっているからである。評者も実は同時期に編者として研究論文集を上梓したのだが、このような仕組みを掛ける事は思い及ばなかった。研究対象に対する筆者の立ち位置の表明が重要と自覚しながらも、「客観性」を装う論文という表現形式に安易に妥協してしまい、各表現主体の位置を組み込む仕掛けには考えが及ばなかったのである。

次にテーマに関してである。本書のサブタイトルに表れている「非境界的世界」という共通テーマは非常にユニークではあるが、同様の編集企図を「多元性」や「越境性」、「ディアスポラ・移民」という異なる表現で刊行している研究書は、特に移動性を社会の動態に組み込んでいると見做されている中東関係では少なくない。前述した評者が関わった編書でも、国家から見た周縁的存在が国家内部と外部を繋ぐ越境的＝インターフェイス的役割を果たしていたという諸例を示し、国民国家という枠組みの相対化を試みた[2)]。しかし、同類テーマの他書に比して本書の独創性は、タイトルとなった『「断」と「続」の中東』の、「断」にあ

1）　三木亘『三木亘著作選　悪としての世界史――中東をめぐって』三木亘著作選編集委員会発行、早稲田大学イスラーム地域研究機構、2013 年。同書の抄録、『悪としての世界史』文芸春秋（文春学芸ライブララリー）が、2016 年 8 月 20 日に出版された。

2）　田村愛理・川名隆史・内田日出海編『国家の周縁――特権、ネットワーク、共生の比較世界史』刀水書房、2015 年。

ることは間違いない。評者の編書では、一見異なる構造に属しているように見える諸集団間の生活上の連「続」面に各論考の重点を置いた。しかしながらそのような視点は、当初から異集団間の「断」を無意識の前提とし、境界を超えた「続」関係構築にのみ注目していたことに、本書により気付かされた。指摘されてみれば当然のことなのであるが、「断」と「続」は表裏一体で切り替え自在の行動様式なのである。これに関しても三木はかつて、「イスラーム世界の人々の行動様式は、たくさんのプラグを持った切り替え自在のカートリッジのようなもの」と看破していた。本書の編者はこの指摘をさらに、電圧や形式の異なるプラグ同士、すなわち異質なもの同士の連続／断絶の切り替えはどのような連結方式において可能なのかという課題に考察を進めている[3)]。この課題の追究は、紛れもなく類書に例を見ない本書のオリジナルな視点である。では、この課題の追究に本書の研究者達がどのように挑み解明の手掛りを提示しているのかを見てみよう。

手掛かりとなるキーワードは、第I部「コミュニケーションの相貌」に多く含まれている。多民族言語社会オマーンにおける人々のコミュニケーションが「了解不可能性」を前提とした不完全な相互理解の下に成り立っているという指摘（大川真由子）。イエメンの嗜好品カート（覚醒作用のある植物の葉）商人の商売維持の重要な要素である関係性の調整弁としての「浮気性」の指摘（大坪玲子）。モロッコ・アトラス山村の女性たちの出産という肉体的経験にまつわる饒舌な語りに表れる多様な不確実性（井家晴子）。これとは真逆にレバノンの調査地における村人の容易な客体化を拒む「語られなかったこと」「短めの言葉」に潜む意味を感知しようとする調査者の感性（池田昭光）。モロッコにおける偶然性を介して付いたり離れたりする肌理細やかで身体間的な対人関係とそれを可能とする情報源となる人についての情報の重要性についての指摘（齋藤剛）、など。

以上のキーワードに留意しつつ読み進めると、第II部「地理空間と社会空間」では、両空間で織りなされる非境界的現象に注目される。その悲惨さに焦点をあて報道されがちなレバノンやシリアでの内戦は、後発グローバリゼーションの結果生み出された移民現象を促進し、それが近代国民国家そのものの枠組に変化を与えようとしているという指摘（宇野昌樹）は、まさに2016年度に起きたBrexitやトランプ現象の起因と重なる。また、イエメンから持ち込まれた聖人信仰が外来と意識もされずにインドネシアのイスラーム文化のメインストリームとして取り込まれて行く事象（新井和広）や、これと逆に、様々な人間諸集団を徹底して分類しカテゴライズし、重層的に張り巡らされた境界による差別と分断が集積されている移民国家イスラエルの現実が示され（錦田愛子）、破壊的にも受容的にも分断的にも展開されている今日の人間集団の多様な政治的あり方が提示されている。

第III部「時間を超えて」は二本の音楽関係の論考のみで構成されているが、評者としては個人的には最も刺激的で面白いと思った部であった。アラブ音楽の旋律に現れる時空を飛び越えた切断と接合とそれを可能にした具体的な技術的要素や音楽理論に触れられているからである。現存のモロッコのベルベル吟遊詩人が円盤状楽器で旋律を生成する楽器を作成しようとしている事実と、それが14世紀カタルーニャの哲学者・修道士リュイの理論と重複することの偶然の発見と驚嘆（小田淳一）、また、民衆的ズィクルの中に現れたアンダルシア音楽のメロディー探求への旅（堀内正樹）は、犯人探しの探偵小説にも似た展開を楽しみながらも、音楽とイスラーム学の不可分な一体性への発見へとわれわれの知見を導く。最後に、お馴染みのどんでん返しでイスラーム世界では音楽と宗教は別物だと境界を引いてしまっている思い込みが見事に覆される点でも探偵小説風である。

第IV部「象徴のはたらき」では、身体、声、言葉という象徴レベルでの多面的な非境界的様相が示される。トルコのマイノリティ宗派のアレヴィーがかれらのセマー（神秘主義教団の修業）・パフォーマンスを通してマジョリティとの境界を融解していく様子（米山知子）、ウンム・クルスームの歌がイスラエルにおいてさえ持つ影響力（水野信男）。最終章でもう一人の編者である西尾哲夫は、写本比較から中東世界におけるアラビアンナイトテキスト伝承の形成過程を追い、従来の研究アプローチは、今まさにわれわれが思い込んでいるように、「イスラーム的」、「アラブ的」、「民衆的」アラビアンナイトの再構築を目的としてテキスト自体を学術的に囲い込んできたことを指摘し、17世紀のアラビアンナイト写本には近代キリスト教的な解釈が入り込んでいるという驚くべき可能性を示唆している。

3）　堀内正樹「世界のつながり方に関する覚え書き」『成蹊大学文学部紀要』第49号、2014年、61–85頁。

三木史観が受け継がれる場

以上、本書という表現の海を評者なりにゆたゆたと游いでみた。游ぎながら本書のテーマである、「境界の連続／断絶の切り替えはどのような連結方式において可能なのか」という課題への答えを今一度探してみたい。第 I 部で解明の手掛かりとした、「不完全な相互理解」、「浮気性」、「経験の不確実性」、「客体化の拒否」、「偶然性」、「情報を持っている人の情報の重要性」のうち、提出された課題解決のための前提条件となるのは、「不完全な相互理解」、「経験の不確実性」、「客体化の拒否」を常態として生きる中東社会の人々である。次に考えるべきは、不完全で不確実で客体化も拒否する人間関係がいかに社会として成り立っているのかという命題の証明となる。そして、もしかしたらこの命題を証明に導く補助線のようなものに当たるのが、「浮気性」、「偶然性」であるような気がする。すなわち、人々の間に社会というものに対する「不完全」「不確実」という前提条件が共有されており、にもかかわらず／あるいはそうであるからこそ、社会関係を結び（続）／切る（断）選択行動において、「浮気性」や「偶然性」が必然的に織り込まれるのである。西尾は、この偶然性を「織り込み済みの偶然性」と指摘しているが、これが作用するのは、三木が述べていたように中東社会の人々の間に、日本の現地事情通には「アラブのIBM（インシャアッラー、ブクラ、マレーシュの頭文字）」としてつとに有名な「偶因論的時間概念」が共有されているからではないか。また、各個人のこれらの状況的選択を保証し有効にするためには、情報を持っている人の情報、すなわち情報源に対するレファランスが重要になる。とすると、先に掲げた命題に対する解は、ひょっとするとこの「レファランス性＝信用＝コネ」にあるのではないだろうか？これについては、齋藤がそのコラムで「バザール的知」と「ハディース的知」の共振として、前者の多様で過剰な情報を確定するには後者による精密な調査による保証が必要になると解説していたが、評者にはこの両者の共振は、今日の不特定多数と繋がる SNS 型社会のあり方とも共振しているように思われた。勿論、ここでそう簡単に正解が見つかるとは思えないし、解は一つではなかろう。各読者が、多元的で不確実な社会を生き抜くそれぞれの解を本書から求めてみると良いのではないだろうか？

今後の課題として、編者および本書の執筆者たちに期待するのは、本書で提出された諸概念を応用力あるものとしていくために、さらなる比較と理論化に取り組んで欲しいということである。比較に関しては、研究対象に対するロマン主義との批判も射程に入れて、中東・イスラーム圏以外の他地域の研究者との連携と共同研究が必要になるだろう。また、多元的複合社会を理解するための理論をどのように立てるのかという問題からもやはり逃れられないと思われる。この点に関しては、堀内はすでに「まえがき」でこの課題を自らに課せられた宿題とし、いかに「個の集積として歴史や社会を構想する」のかという新たな課題を設定しているが、これも三木が述べていた「多次元の関係の無限の連鎖から成るいわば華厳経の世界のような」存在様態の解明に通じる。しかし、世界が曼荼羅状態にあるとして、いかにすればわれわれは多様なものを多様なままに認識することが可能となるのだろうか。堀内は、無定形で無秩序なとりとめのない世界における個の定立方法を解明する可能性の手掛かりを数学的（統計学的）思考に求めている。社会のさまざまな人や事物が常に断／続を繰り返し組み替えられているとすれば、当然事象の「組み合わせ方」が重要となる。そして、ありとあらゆる組み合わせの可能性を考えるのが数学的思考であり、この組み合わせ方を徹底して究明しようとしたのが中東・地中海世界なので、非境界的世界と数学的思考は強い親和性があるという発見である。非常に示唆に富んだ興味深い指摘であるが、この発見をいかなる表現形態に載せて、説得力あるものにしていくのかには、まだこの先の道程が必要であろう。しかし、その道への入り口に立っているという意味で、本書の立ち位置はやはり独創的である。

最後に、述べておきたい。本書を游いでみて多くの発見があり楽しかったが、とりわけ印象的だったのは、若手研究者の論考やコラムのそこここに故三木先生の思考の影響が噴き出していることであった。本書はある意味で、三木が提示した「等身大の世界の叙述」という公案に対する、堀内と西尾というグルと弟子たちとの真剣な問答集という面もあるように思われた。この問答を通して、若手研究者が自らの問題として、三木史観を身体感覚的に受け継いでいるのが感じとれた。三木先生が亡くなった時に、教え子の一人である詩人の新井高子が、「（先生の史観を受け継ぐ人がいないので）、先生の本はみなしごのように忘れ去られてしまうのではないか」としきりに心配していたが、どうやらその心配は杞憂に終わりそうだ。その意味で、本書はまるで三木先生へのオマージュであるかのような感を受けている。本書に執筆した若手研究者の

方々の殆どが彼を直接には知らない世代だと思うが、三木史観が編者を通じて、脈々と次世代に受け継がれていることに嬉しさと感動を覚えたことを付しておきたい。

（田村　愛理　東京国際大学商学部教授）

安田慎『イスラミック・ツーリズムの勃興――宗教の観光資源化』ナカニシヤ出版　2016年　244頁

「待望の書」というべきであろうか。大勢において、その評価を素直に首肯する気持ちに偽りはない。だが同時に、何の保留も加えることなしに、本書の主張するところを肯んじるにはいささかの躊躇を感じずにはおられないのも事実である。

本書は、若く知的な地域研究者が、イスラームと観光産業がどのように関わってきたのかを探求し、練り上げた理論的枠組みを一個の著作に結実させた書物である。2012年に京都大学から「博士（地域研究）」の学位を授与された際の提出論文を改稿して、2016年に出版された。

全10章（序章、終章と本論4部8章）からなる全体は、シーア派の人々の参詣行為が、シリアで宗教観光として組織化される過程を、イスラミック・ツーリズムが世界的な興隆をみせる過程へとつなぐ形で以下のように構成されている。

序章「イスラームとツーリズムをめぐる分断と架橋をめぐって」

第1部「イスラミック・ツーリズムにおける宗教市場――宗教の観光資源化をめぐる力学」
　第1章「イスラミック・ツーリズムにおける観光資源化――宗教観光の商品化・市場・コミットメントをめぐって」

第2部「シリア・シーア派参詣地の成立と発展」
　第2章「シリア・シーア派参詣地の形成――コミュニティの宗派資源をめぐって」
　第3章「宗派資源から政治資源へ――バアス党体制下におけるシリア・シーア派参詣地」
　第4章「ヒエラルキーからネットワーク・ガバナンスへ――シリア観光戦略のなかのシーア派参詣地」

第3部「宗教観光としてのシリア・シーア派参詣」
　第5章「産業化するシリア・シーア派参詣――イスラーム旅行会社が創り出す宗教観光産業の秩序」
　第6章「排除する空間から包摂する場へ――宗教景観における分断と共有」
　第7章「儀礼か、パフォーマンスか――シリア・シーア派参詣地における宗教実践」

第4部「イスラミック・ツーリズムの勃興――宗教の観光資源化」
　第8章「イスラームを再定式化する――宗教観光からイスラミック・ツーリズムへ」

終章「イスラミック・ツーリズム研究の新たな地平へ」

一見してわかるように、本書の中核をなすのは、ダマスクスのサイイダ・ザイナブ廟をはじめとするシリアのシーア派参詣地とそこでの参詣行為が、観光産業と関わりつつ、どのように変遷してきたのかを論ずる第2部および第3部の各3章であり、これを第1部と第4部の各1章が挟み、さらに前後に序章と終章が配されている。元となった博士論文には直接目を通していないが、公表されている論文要旨［安田2012］によれば、原論文は全11章（序章、終章と本論3部9章）からなり、構成の大幅な変更があったと推測される。

再編の過程を踏んだこともあるのか、本書は部構成、章構成とも明確な意図に基づく仕上がりでわかりやすい。